



一時帰国面接

今月は、ある面接のために日本に一時帰国しています。ここまで遠出をする面接はそうそうありませんが、家族にも友達にも会えますし、桜の季節に、日本に帰ってこれることは、とても嬉しいことです。その面接とは、文化庁の新進芸術家海外研修制度への申し込みのためでした。スウェーデンの大学院で、空間照明の研究をしたいと思い、この制度に申し込ませていただいたのですが、残念ながら2次審査（面接）で落とされてしまいました。すでに英国で在住、活動をしている私が、また海外で研修をするということが、引っかけたのでしょうか。今後は、日本と英国、両国を拠点に活動の幅を広げていきたいと願っているのですが、それがうまく伝わらなかったのかもしれません。

本当なら、面接の前に、研修先・教育機関の受入承諾書や合格通知を、文化庁に提出できないと、面接を受ける資格がないということだったのですが、スウェーデンの大学がどうしても合否を出す月を早められないということだったので、特例で文化庁から面接を受けさせていただくことになりました。しかし、万が一、大学が受からなかった場合のプランBとして、英国の大照明デザイナーの下で研修をさせていただくということ

も計画書に書き、提出させていただいたので、その部分を受け入れてもらえなかったのかもしれませんが（その計画書で、なぜか第一審査は通り抜けたのですが…）。

とにかく、照明のことを違う角度から掘り下げて勉強したいし、それを今後の舞台照明デザインの発展に繋げていければと、強く願っていたので、その思いも届かず、とても残念です。しかし、これで諦めたくはありません。とりあえず大学の合否を待ち、もし受かったら来年に入学を持ち越せるか聞いた上で、次回また挑戦したいと思います。照明家協会の方々にも、たくさんのアドバイスとお力添えをいただいたことに深く感謝しております。次回も是非よろしく願いいたします。

浪人になった私ですが、回目の再挑戦の前に、いろいろと試してみたかったことや、実践に移せる研究内容は、できる範囲で進めていけたらと思います。その中の1つは、仮設照明と常設照明がどのように、うまく舞台芸術に融合できるかということです。そもそも、舞台照明のほとんどは仮設ですが、常設で、照明自体がインсталレーションや舞台美術にもなり得て、時にはそれがパフォーマンス

の一部となり得るものを模索していきたいと思っています。そのほかに、環境・空間照明について、もう少し知識をつけて、そのような要素も舞台照明に取り入れていけないか、考えていきたいです。

ここ数年、私の照明デザインのお仕事は、野外や劇場環境外でのお仕事が増えてきた中で、空間の雰囲気や壊さずに、どのように役者と空間と観客を、照明で結びつけるかということを考えることが多くなってきました。ロンドンで多くなってきたのは、サイト・スペシフィック（特定の場所に存在するために制作された美術作品および経過のことをさす）という公演スタイルで、観客が指定された空間内を、自由に歩き回って、物語を追うという、半参加型の公演です。半参加型と言っても、観客が何かセリフを話さなければならないということではありません（そのような公演もありますが）。本来の舞台観劇は、観客が客席に座って舞台を観る、受動態ですが、観客も物理的に舞台の一部に入り込むという、能動的な観劇の仕方は、普通観劇との決定的な違いです。

古い歴史的建築物や、教会、工場や学校なども舞台としてよく使われますが、そのような空間で、照明デザインを考えると、普段劇場で使う舞台照明を使うと、どうしても機材が目立ってしまって空間の雰囲気を壊してしまったり、観客が機材に近づいたときの安全性なども懸念されます。私は劇場照明も野外用のLEDも、そのような現場で使ってきましたが、もっとデリケートで小型、かつパワフルで、観客の視線に入らない機材や、電池、電源の上手な使い方も学んでいきたいのです。今後、舞台を観たことのない人たちでも、観に来たくなるような身近な空間での公演や、舞台をよく観る人でも驚くような挑戦的な空間での公演も、照明で手助けしていけたらいいなと思います。



九十九里の夜桜